

はじめに

「建築」という用語は、建築史家・建築家の伊東忠太によって、西洋の「Architecture」の訳語として提唱され普及した。これは、建築が単なる家を造る技術や工学（造家）を超え、学問、芸術、そして世界や思考の在り方（モード）という広範な性格を持つことを主張するためであった。建築教育の原点には「空間とは何か」という根源的な問いがあり、建築は常に人類が自らの「人間らしさ」を規定し、変遷させてきた歴史を反映している。

建築は、狩猟生活から定住生活への移行に見られるように、人々の活動や暮らしに深く寄り添ってきた。その営みは、地理、政治、宗教、哲学といった我々が考えるほとんど全てのジャンルに関わる壮大な概念である。本記事は、建築史を動かしてきた主要な建築物、建築家、理論、そして思想的背景（宗教、哲学、政治）を指標として提示することで、読者がこれらの情報を単なる知識のダイジェストとしてではなく、建築や人間存在そのものについて自ら思考を加速させるための燃料となることを目的としている。

1章 建築史

古代建築：文明の力と理性の表現

古代建築は、紀元前1万年頃の初期住居から紀元後5世紀頃のローマ帝国滅亡までを指し、エジプト、メソポタミア、ギリシャ、ローマといった四大文明の力と高度な技術を象徴する。エジプトではファラオの権力を示す巨大な石造りの墓や神殿（ピラミッド）が、ギリシャでは比例と調和を重視した大理石の神殿（パルテノン神殿）が建設され、幾何学的秩序と人間の理性に基づいた美が追求された。日本では仏教伝来以前の掘立柱構造や高床式倉庫から、法隆寺のような仏教建築が発展した。

特に古代ローマでは、石材、煉瓦に加えローマン・コンクリートが発明され、アーチ、ヴォールト、ドームといった構造技術が飛躍的に発達した。これにより、公共性の高いコロッセオや水道橋、そして壮大さと実用性を兼ね備えたパンテオンのような建築物が実現し、ローマ社会の秩序と実用主義を具現化した。この時代の建築は、後の西洋建築の規範となる古典的要素を確立した。

中世建築：宗教的権威と構造技術の飛躍

中世建築は、キリスト教の支配と封建制を背景に、宗教的権威の象徴としての教会堂や、防御を重視した城塞建築が発展した。西洋では、重厚で防衛的な印象を与えるロマネスク様式（ピサ大聖堂）から、12世紀半ばに光と垂直性を極限まで追求したゴシック様式へと移行する。尖頭アーチ、リブ・ヴォールト、フライング・バットレス（飛び梁）という革新的な技術により、壁の荷重が分散され、巨大なステンドグラスを嵌め込むことが可能となり、教会内部は「神の光」で満たされた。

一方、日本では鎌倉・室町時代に武家階級が台頭し、防御重視の山城が発達した。宗教建築では中国・宋から大仏様や禅宗様といった新様式が伝来し、従来の和様と融合。また、住宅建築では畳や床の間といった要素を持つ書院造が発展し、さらに茶室建築では千利休の影響のもとで「わび・さび」の精神に基づく簡素な

空間が確立された。中世は、東西ともに社会の変化を反映しつつ、技術的な革新が飛躍的に進んだ時代といえることができる。

近世建築：絶対王政の誇示と和風住宅の確立

近世建築は、西洋ではルネサンス、バロックといった様式が展開し、古典古代への回帰と絶対王政による権力の誇示が目的となった。ルネサンス様式（例：ラ・ロトンダ）は、調和と均整、左右対称といった人間中心の合理的な美を追求した。これに続くバロック様式（ヴェルサイユ宮殿）は、絶対王政と対抗宗教改革を背景に、躍動的な曲線、豪華な装飾、そして劇的な照明効果を特徴とし、王侯貴族の壮麗な宮殿が多数建設された。

日本の近世（安土桃山・江戸時代）は、全国統一を経て権威の象徴としての近世城郭（姫路城の天守閣）が完成した時代である。同時に、住宅建築では書院造が完成形に達し、茶室の要素を取り入れた数寄屋造（桂離宮など）が発達し、現代の和風住宅の基礎が確立した。また、平和な時代となったことで、日光東照宮のような霊廟建築や、庶民の生活に合わせた都市部の町家が地域特性に合わせて発展した。

近代建築（モダニズム）：機能と合理性への転換

近代建築（モダニズム）は、19世紀末から第二次世界大戦終結頃までに世界を席卷した、過去の様式との決別を掲げた国際的な潮流である。産業革命で得た鉄、ガラス、鉄筋コンクリートといった新素材と、機能性、合理性、経済性という三大原則がその核心であった。「形は機能に従う」をスローガンに、装飾を排し、構造の論理を直接表現することを目指した。

ル・コルビュジエが提唱した「近代建築の五原則」（ピロティ、屋上庭園、自由な平面・ファサード、水平連続窓）は、鉄筋コンクリート構造を前提とした設計指針として確立した。ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエ、フランク・ロイド・ライトの三大巨匠がその理想を具現化し、特にドイツのバウハウスは、「芸術と産業の統合」と「機能主義」を徹底した教育を通じて、モダニズムを「国際様式」として世界中に普及させる決定的な役割を果たした。

現代建築：多様な思想とグローバルな課題への対応

現代建築（1945年以降）は、モダニズムの機能主義を継承・深化させつつ、その単調さや非人間性への反省と批判から、極めて多様な思想と様式が生まれた時代である。1960年代後半に登場したポストモダニズムは、「Less is a bore（より少ないことは退屈だ）」という標語のもと、近代建築が排除した歴史性、地域性、装飾を再評価する流れを生んだ。

その後、安定性や均質性を意図的に「解体」する脱構築主義（デコンストラクティヴィズム、例：フランク・O・ゲーリー）が台頭した。さらに、現代では、素材感や場所の固有性を重視する現象学的アプローチ（ピーター・ズントー）や、サステナビリティ、自然との共生をテーマとする建築（隈研吾、SANAA）が主流となっている。日本の建築家は、伝統的な要素を現代的に再解釈する手法により、国際的な建築界において大きな影響力を持つ。

2章 建築の今

都市デザイン：持続可能性とスマートシティへの転換

現代の都市デザインは、単なる美しさや規模の追求から、地球規模の課題解決へと焦点がシフトしている。特に注目されているトレンドは、リジェネラティブな都市づくり（環境や社会を積極的に再生）、ウォークアブルシティ（歩行者中心の快適な街づくり）、スマートシティ・テクノロジーの融合（AI・IoTの活用）、そしてバイオフィリックデザイン（自然要素の積極的な導入）である。サウジアラビアの「ザ・ライン」のような未来型スマートシティプロジェクトは、ゼロカーボンエミッション、超高密度居住、完全な技術統合を目指し、世界の議論の中心となっている。また、シンガポールのような計画都市や、日本のFUKUOKA Smart EASTなどでは、最新テクノロジーをインフラに組み込み、生活の利便性とエネルギー効率化を図っている。同時に、ソウルの「ソウル路7017」のように、既存の都市インフラを人間中心の公共空間へと変えるプロジェクトも重要視されている。

現代の建築家：自然との共生と社会への貢献

現代の著名な建築家たちは、「サステナビリティ」「自然との共生」「人間中心の空間」といったテーマを追求している。石上純也は、建築を風景や環境全体の一部として捉え、自然と人工物が溶け合う詩的な空間を創造している。SANAA（妹島和世＋西沢立衛）は、ガラスや曲線を用い、建築の輪郭を曖昧にすることで、内と外が緩やかにつながる軽やかで民主的な空間を生み出している。また、隈研吾は「負ける建築」を提唱し、木材や竹といった自然素材を多用することで、環境に溶け込み、謙虚に存在する建築を国際的に展開している。坂茂は、紙管やコンテナなどの安価でリサイクル可能な素材を用いた革新的な構造システムで、災害復興支援など人道的な貢献に焦点を当てている。これらの建築家は、技術や美学だけでなく、社会や環境に対する倫理的な姿勢を建築で表現し、未来の空間のあり方を提示し続けている。

建築理論：モダニズムの限界と都市への批評

現代建築の理論は、モダニズムの限界に挑戦し、社会や都市への鋭い批評を通じて発展してきた。1960年代には、イギリスのアーキグラムと日本のメタボリズムという二つの先駆的な理論運動が起こった。アーキグラムは「プラグイン・シティ」や「ウォーキング・シティ」といった概念を通じて、建築を固定されたモノではなく、常に変化・移動するシステムとして捉える未来志向のユートピアを提案した。一方、メタボリズム（黒川紀章、菊竹清訓ら）は、「生命体としての都市」という思想を掲げ、都市や建築が新陳代謝（メタボリズム）を繰り返す有機体であるべきだと主張した。構造体（インフラ）に交換可能なユニットが接続・分離することで変化に対応する構想は、持続可能性やプレファブ化の概念の先駆となった。現代では、レム・コールハースが「ビッグネス」や「ジェネリック・シティ」といった概念を通じて、現代都市の非合理性やグローバル化の影響を分析し、建築と資本主義、政治的現実の関係を理論的に探求している。

3章 思想と建築

宗教と建築：信仰と世界観の具現化

宗教建築は、各宗教の信仰の核心、統治システム、そして世界観を物理的に体現したものだ。神道建築は、清浄さ、質素さ、自然との調和を重んじ、伊勢神宮の式年遷宮に象徴される永遠の命と清浄の維持という思想を反映する。キリスト教建築は、ゴシック様式に見られるように、垂直性とステンドグラスによる光の表

現を通じて、唯一神への超越的な崇敬と救済を視覚化した。イスラム建築は、偶像崇拜を排し、アラベスクや幾何学模様といった無限に続くパターンにより、アッラーの無限性と普遍性を抽象的に表現している。映画『ミッドサマー』のホルガの建築は、供犠の寺院の破壊を通じて、彼らの教義である**「死と再生」「清算と新生」を建築行為そのものによって表現しており、建築が信仰のドグマ**をいかに機能的に具現化するかを示す極端な例である。

哲学と建築：理性、倫理、精神の表現

哲学と建築の関係は、人類の理性や存在の構造を反映する。古代のウィトルウィウスは、建築が満たすべき三原則「有用性、堅固さ、美」を提唱し、建築を社会の秩序と理性を地上に構築する行為とした。ヘーゲルは、建築を芸術の初期段階、すなわち「象徴芸術」として位置づけ、物質の巨大さを通じて、未だ明確でない精神的な内容を暗示する役割を担うと考えた。一方、ウィトゲンシュタインは、自ら設計した邸宅において、装飾を排し機能と構造の論理を追求することで、彼の哲学が求める**「論理的な明晰性」と「倫理的な態度」を建築空間で実現しようと試みた。彼の建築は、言語が世界の境界を示すように、生活空間の境界を厳密に定義する純粋な論理の表現**であったと言える。

政治と建築：イデオロギーと権力の顕示

建築は、その政治体制のイデオロギー、権力構造、公共の価値観を視覚的に具現化する媒体である。権威主義の建築（ナチス、ムッソリーニ）は、巨大さと威圧的なスケールを持ち、個人の矮小化と国家権力の不滅性を象徴することで、国民に服従を強いることを目的とする。これに対し、民主主義の建築は、控えめな尺度とガラスの使用による透明性を重視し、公共の討議と市民の参加という価値を促進する。社会主義の建築（ソビエト連邦など）は、集団主義の勝利というイデオロギーを背景に、壮大ながらも均質で規格化された集合住宅を大量に建設し、階級差のない平等な生活を提供することで、共同体の理想を物理的に達成しようと試みた。

おわりに

本記事「建築事始」は、建築の基本の「き」を学ぶ以前の、知っておくべき思考のフレームワークをまとめたものである。建築を構成する多様なレイヤー（歴史、理論、宗教、哲学、政治）を通じて、読者が建築という営みがいかに人間の根源的な営みに関わっているかを認識することが目的である。

読者には、ここで得た知識を単なる情報として終わらせるのではなく、自宅や学校といった身の回りの空間を、社会のシステムや思想と関連付けて分析・考察することを推奨する。建築は思考のモードであり、その楽しさを味わうことで、読者の建築旅が楽しく、複雑で、豊かなものになることを切に願う。